

「大塚の富士見坂 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

江戸時代の浮世絵を見ると、江戸市中各所から普通に富士山が見られたことがわかる。もともと武蔵野台地の東端の、台地と低地の間に造られた江戸の街には坂が多く、高い建物のなかった江戸時代には遠くの山がよく見えたのだ。



絵は北斎の描いた江戸から見た富士山である。場所は現在の宮益坂だという。仁丹塔から渋谷駅に下る坂である。もちろん現在の宮益坂からは富士山は見えないが、当時は普通に見られたのだろう。富士山の手前には丹沢山塊、右の少し高い山は大室山だろう。

江戸時代に富士山が見えた坂道には「富士見坂」という名称が多かった。現在でもその名残で、名称だけはたくさん残っている。写真は西日暮里の道灌山に残る富士見坂である。現在、富士山を見るのは難しい。



道灌山に限らず、現在の東京で、富士見坂と呼ばれる坂(地上)からは富士山を見ることはほぼ絶望的である。だが少し前までは、大塚の富士見坂からは、本当に富士山が見えたのだ。



上の地形図が、大塚の富士見坂の位置である。○は本校の位置、ピンクの道が国道 254 号(川越街道)、そこを横切る不忍通りを左折したところが「富士見坂」である。しかし都市部の地形図を見ても、地形を読むのは非常に困難である。そこで「色別標高図」を作図してみた。



こうすると、富士見坂付近の地形がよくわかる。武蔵野台地東端の舌状台地(小石川台地)から、音羽川源流の浸食谷に下りる坂が正体であると読図できる。ちょうどその延長上に富士山があるので「富士見坂」と呼ばれたのだ。